



岐蘇林友

第百廿四號

目次

- ◆山楹に就て
- ◆保護林調査の爲め土高地へ
- ◆菓だつ頃か
- ◆若き傍輩諸兄の爲に
- ◆空想と煩悶
- ◆諸片俄然覺醒決然躍起せよ
- ◆會員動靜
- ◆學校便り
- ◆謝恩金領收
- ◆校友代領收

榛

大正九年二月二十五日 第百廿四號 明治四十四年六月十四日 (第三種郵便物認可)

山楹に就て

西澤生

荒廢禿瘠の山地にして地味瘠悪なる所には、到底貴重なる樹種を植栽し得ること能はず、尙其の儘放棄すれば山地は益々崩壊し土砂の流出を増すのみである。故に斯る土地の復舊事業として、本樹を造林するが得策かと思惟するを以て茲に本題を掲げて當業者の御参考に供せん。

樹木の特長

一、名稱 和名を「ヒメヤシブシ」と唱へて、乾燥瘠悪なる土地に生育して、能く裸出せる土砂の崩壊を杆止するの効あるを以て、之れを「ハゲシバリ」「ヤマシバリ」「ツチシバリ」「ガケンバリ」等の方言がある。又之は樺木科の赤楊屬にして「ミナシバリ」の種類の屬するものである。

一、形状 葉は楕圓形にして先端尖り、長さは幅の殆んど三倍にして、通常二寸許なれども生育良きものは稀れに四寸位に達する者もある、邊緣重鋸齒にして支脈翼状をなし、裏面に隆起する、又托葉は新芽のときは之れを有するも、成葉になるに従ひ脱落するものである。

雄花は、三四月頃に淡褐黄色の細花、簇生して開き萎蕤状をなし。雌花は、短少にして穂状をなし、雄花と等しく包葉を有し、此状は赤楊に倣ふ。實は、赤楊の實に酷似するも、少しく小さくあり、八九月頃に

至り黒褐色となる。

幹根は、發生後四五年を経れば、一株より三乃至六本の幹叢生し、殆んど主幹なるものなきが様である、凡そ十年位を過ぐれば一間四方許に大暢し、根の廻り一尺乃至一尺五六寸に達す、然かし此期に至ると逐年枯稿に傾く者多し、故に斯る期に入らざる前即ち七八年目毎に伐採し萌芽力を保持するが良しくある根は、走根にして鬚根を有し、根疣より空氣中の遊離窒素を吸收するを以て、瘠地にも能く生育するのである。

苗木立法

植栽苗木に二種ある、即ち一は天然生苗木を以て山地に植付くるものと、一は苗圃に於て養成せる苗木を以て、造林するものがあり、何れを以て利益あるかは、一概には言ひ難きと、天然生苗木の多く在る所に於ては、天然生苗木に依る方便利なりと雖も天然生若木のなき所にありては、苗圃養成の苗木を以て、造林せねばならぬことである。ところで偶々之れを養成せる者あるも、其の方法良しきを得ざる爲め、發育至つて悪しく一時發生せるも其後に至り悉く枯死することあり。故に之れが養成方を述べれば

一、苗床 日當り及び風通りの良しき肥沃なる砂質壤土の土地にして、常に排水灌水の便ある所を撰びて、表土を鋤き起し、且つ土塊を打ち碎き、之れに初めに一尺次に三尺次に一尺又次に三尺と交互に分ち、三

尺の部分を高き三四寸の床に作り、其上に糞尿三分水七分の肥料を撒布し、或は油粕の粉沫を一坪につき凡そ二三百の割合にて撒布し、表土と能く混和したる上を地均し一坪につき避種子二合の割合に播種し、其の上に砂交りの赤土を撒布し、其の上に鋸屑又は鮮苔若しくは藁を以て敷をなす、然るときは播種後四週間に於て發生すべく、殊に苗木時代は日光の直射を嫌忌するもので此の時代に多く枯死するに依り夏季は丁寧に日覆をなし、又降霜期には霜除を設けるを可とす。

山地植栽法

植付の期節は、氣候風土に依り差異あれども、普通は三月上旬より四月上旬頃にして未だ新芽の開かざる前を良とし、或は十一月頃植付するも可とす。而かして苗圃より苗木を掘り取るには、其の根部にある疣状物を離去せざる様特に注意し、掘り取りたる苗木は、相當の束となし之れを山地に運搬し、直に濕氣ある所に假植するか日陰の地に水を灌ぎ貯へるもよし。植込の際には幹の長さものは、一尺位の長さに切

込み植穴を掘るには、可成穴を廣く、深く即ち根の充分に廣がる大きに掘るを可とし其の穴中には細土を敷し、之れに木灰五勺位或は堆積肥料を混じて、根部を埋め、更に掘り取りたる土砂を以て之を埋植するなり。株間は普通の樹種と異なり、四五尺の距離にして一町歩凡そ一万餘本を植栽するを可とす。而かして此の樹の性質は陽樹なるを以て、陽燥の地を好み、陰濕の地に適せざるもの、如し、又傾斜の如何に急なる所土壤の殆んど無きが如き岩石の間にも能く鬚根を固着して生育し得ること、他樹の遠く及ばざる特長がある。蓋し本樹を植栽する地は概ね崩落し易き箇所なるを以て先づ砂防工事を施し其の上部に苗木を植付くるときは、枝葉繁茂し走根擴張して非常なる發育をなす、殊に松苗と混植するときには至つて良好なる成績を見るに至る。(完)

保護林調査の爲に上高地へ

保護林設定には戸隠山だの筑波山が良いとか會津の飯盛山が良いとか随分喧しかつた而し堂々たる御大典記念保護林と言ふ以上は百や二百の小面積に一寸やそつどの樹がある位じゃ面白可笑しくもない。記念保護林設定の主旨は山容奇眺望雄大真に天下の絶勝地たるのみならず茲に種々の動植物を保護生育せしめ長く風致の保存

と林學上の研究資料を殘さんとする者を撰定するを目的とす、此の大問題を満足させるには松本市の西方約十里梓川主流に位し信濃國境の安曇國有林がよい、彼處は日本アルプスの主要部を占めて居る景色の雄大な事は今更言ふ迄もないが温帯寒帯の原生林や各種の珍らしい高い植物もあれば上高地と言ふ温泉もあるし「クラシム」(令羊)なんて岩の上で踊る奴も居ると云ふので、到頭上高地附近梓川の清流を狭んで燒嶽穂高嶽蝶ヶ嶽長堀山六百山一帶の地一萬八百餘町歩が先づ以つて御大典記念保護林になつた物らしい。

そんな景氣のいい、保護林なら自分も是非一見物したいものだと思つて居たら去年の八月初旬に同級の一人 H.YANO 君が安曇の僕の茅舎を訪めてくれた Y 君は御嶽駒ヶ嶽を登山して來たが尙日本アルプスを縦走すると云ふ元氣であつたから好都合だと思つて二人にて上高地記念保護林視察に出掛ける事にした。筑摩にて見る山と安曇にて見る山とは同じ日本アルプスでも其の趣が違ふ筑摩にては稍々遠く山が霧か霞かに覆はれる時は畫中の山水でも見るやうな氣がするが犀川を渡つて安曇の野へ來ると連嶺の偉容殿として野の果に迫つて其の雄大な眺めは我邦に於ても多く他に比類がない。

に亘る時に忽ち此等の河原は濁流がうす巻いて流れて來る其時の恐ろしさと言つたらなない水源は遠く乗鞍嶽にあるので雨休んで二日初めて滔々たる洪水が山谷の間から湧出して來る此の河が氾濫する時は殆ど安曇野の全部が水に浸されるかと思ふばかりの有様だ日本アルプスの頂上に向つて有らん限りの力を以つて降り注いだ雨の水は峰といふ峯谷といふ谷に落ち合ひ寄り合つて狭隘なる谷の岸を洗ひ去つて途中の障害となるものは樹木といはず岩石といはず橋梁家屋と云はず有ゆるものを運び流して平野の中に押し込んで來る二抱えにも餘る橡の樹もある八尺以上もある岩石もある此等が相打ち相混じり岸を浸し道を没して居るより他に途がない水面より立つ霧は凝つて平野の上に蔽ひ山脈の中腹に掛かる時は目に見えぬものは山と水と霧とのみ此の中にも果して人が住んで居るか疑はる、事もある。

併せて梓は名河である谷々の水を集めて稻田の間に引き用ひられて居る梓の兩岸より筑摩安曇へ引かれて行く水路は何條と云ふ事なく清冽な水を湛へて岸に溢る、ばかりである。水草の花が眞白く其の中に咲き眞に心地よく村々の中を縦横に流れて居る此の水路の村落にてはよく昔より水論がある上流と下流と用水の點について争ひが起るので其度

毎に所謂義民老農といふやうな人々がでて治水の功を擧げた話が澤山ある今日の青年は克く古老から爐邊で物語に聞かされる事がある。島々へ九時頃着く此處には東京大林區暑の伐木所即ち官行事業所が有り日本アルプス登山要路である島々松本の間は六里夏期登山者の爲に乗り合馬車や高等馬車が三四十臺も此の間を往復する高等馬車と言ふのは華族さんか使つた自用馬車の古を使ふのが偉い御役人様方が乗られると一人悠々然と之れに召される。草鞋や一里糖を買ひ求めて愈々之から中部日本アルプス即ち上高地保護林にかゝる事になる馬より約一里二股の事務所迄は坦々たるトロード盤木を踏み占め、登つて行くのでつまらない事夥しい兩側は三四十度の急斜地で景色も養もあつたもんじやないやつこの事で二股の事務所へ着くと後の山には花柏の天然林が雜木も混えず眞黒に立つて居る何でも此の邊は玲岩の急斜地へ持つて來て花柏唐櫃か一面に立つて居るの擇伐して居るのださうで盗材調査をした處か全く命かけて一生懸命にやつても一日百五十本位しか出來ない。

夫れかと言ふて餘所から調査の應援も頼まれないで如何に忙かしい時でも獨りでやらなきやならないといふ何故かと思へば「慣れない人では負傷許りして居るので若しもの事かあると御氣の毒ですからだ」と

全く生命を賭して事業に従事して居る森林官の心勞や實に多とすべしと思ふ。此處の事務所では上高地へ行く人の住所名姓を一々調べ掲げて置く昔は種々様々の悲喜劇が演ぜられた關所の様に此所で保護林の草や木を盗みだす奴は御目玉を頂戴する譯だ。事業所を出てか、は Y 君も何もいはず自分も汗を拭く許りすると前方よりつかれた様な一人の登山者が歸つて來て我吾と逢ふや嬉しい様に懐しい様に目禮し御願ですか後から大町の入夫が三人來るか其の人々に汽車に乗るから出來得る限り早く來る様に云ふて下さいと云ふから吾々は勿論快諾をした。

今度は吾々の方より貴殿は御登山なされて來たのですかと云ふと彼の君は更に言葉繼いで曰く一蓮華蕪嶽鳥帽子大天井嶽嶽前穂高嶽穂高嶽上高地等を通つて來た其の時日を費す事十七日山中に露營をして暴風雨の時三日も同一所に滞在した事もありましたと彼の君は連日連夜の不眠不休の爲か意識は明瞭を缺いて居たと考へられる事か多かつた「昨夜上高地に到若して始めて生命を待た様な氣がしました、是非御願ですと繰返し心神朦朧たる状態にて吾々の問ふに答へずにはいられずな洋服を着たま、彼は歸路を急ひだ大正八年度に於て日本アルプス登山者中で一番多くの日々を費し大阪天王寺中學五年生な事か後日新聞紙上

に報導せられて知る事を得た
腹鼓打ち、昇る里餘にして先に頼まれし
三大の夫人に出會ふたから頼まれし如く言
ふと承知致しましたと云ひ乍路上に座を占
めて飯櫃の様な大きな辨當を打ち平げ
出して急ぐ様にも見えられなんだ

又漸次昇つて汚ない小屋が見ゆる此れは清
水屋(土高地温泉旅舎)が官行事業此小屋を
掛下げて登山者の便に供して居るのだ此の
小屋にて清冷な清水に顔を洗つて澆茶す、
り乍ら握飯を噛る其の旨い事は言ふ丈け野
暮だ近所には高山蝶が澤山居て奇麗な蝶が
優しい姿をして飛んで居る「爺が此の蝶を
取り東京に出すと一つ拾銭になるだあ」小
屋の癖いまいましい爺が言ふ

だん／＼と坂を昇り初めると直ぐに脚は疲
れ胸は苦しくなつてしまふ「何んの爲に高
い山に昇るんだ平地に居て済むのに」と不
平を溢すと同時Y君曰く「道樂息子が藝者
買ひする時酔はらつてわい／＼騒いでと明
くる朝になると嗚呼馬鹿／＼しいとふ此れ
切り止め様と思ふが暫く立つと亦騒ぎ度く
なる様に山昇りの道樂者は苦しくつて／＼
ふふそれきり山登は止め様と思ふが暫らく
立つと亦絶頂から雄大な景色を見渡した時
の気分が戀しくなるんです」と
して見ると吾々林業家は一つの道樂息子で
藝者買は朝ばらから床の中で苦しむ吾々は
山に登る時苦むもんだと思つた
坂も傾斜の度を増して苦しいのを我慢して

唐檜の頭が打れて傘松と言ふ木の近所に來
た時は身体は非常に疲れたか一生懸命に登
つて居ると急に周圍が明るくなり坂も緩く
なつたよく見れば徳本峠の頂上に來たのだ
正面には鋸の齒の様な前穂高の頂上か雲と
白い花崗岩の山層を雲間に顯す雨に濡れた
青森檜松の葉が清涼な緑に光る雄大な巖海
抜十尺の是の徳本峠こそ實に記念保護林
の入口として相應しきものである

峠を下るに従ひつて相も變らず急峻である
か前には一歩一歩美しい前穂高が近ずいて
來る岳樺青森檜松は漸次白樺唐檜裏白樺の
混生林に變り幾百年來斧の音を聞かない原
生林は老て朽れて倒れては更に優しい稚苗
を育て幾代變らぬ神々しさを保つて居る
此の山此森林を貫いて静かに走る一條の林
道を辿る内に樹種は落葉松川柳の多くを混
える様になつて來た是れ梓川に近付いた故
かと思ふ間もなく暗い緑の間から眞白な砂
利を噛む清涼な流水が見える針葉樹の様に
眞直の幹を持つ川柳の間に「シナノキンバ
イ」か一面の黄氈を敷きつめて繪に書いた
花園の様になつて居る一つの人工を加ふる
事なく作り出された此の天然の公園こそ實
に吾人か全方を擧げて護らねばならぬもの
であると思ふ

巍我たる前穂高嶺の噴煙せざる前の牧場
を眺めて此の天然公園を過ぎ梓川を横切る
り河童橋を渡り漸く土高地温泉場に着く主
人を始め下女下男迄で心良く迎えてくれた
尺もあらふと思ふ岩魚がスイ／＼泳いで行
く舟頭は急いで糸を垂れると魚はず／＼喰ひ
付き一時間程に四百目位は釣つた舟頭さん
幾らで賣るねと問ふと「百目一圓さあ」と
對岸に着いて土産に買つて後振り返つて
見ると焼岳か丸い禿頭の上に白い湯氣を立
て枯死した白樺の衣を着て納まつて居る直
ぐ前には霞澤岳や六百山が紺青の空から抜
け出た怪物の様に段々眞白に見える花崗岩
の山膚を顯して聳えて居る大正ヶ池に續い
て田代の池があるが此の池は古くから在る
ので今では水が浅くなり水草の白い小さな
可愛い花が池一面に咲いて居る、池の中に
は小さい島が有つて樺梅白樺等がいちけな
庭木みたくに立つて居る島から、へ傳ふて
行ける様に岩の並んで居る様子等は全く人
の作つた庭園としか思われない大きな落葉松
の下には人の墓と思われ土塚が五つ、
六つ列んで居る此の池や此の塚は昔飛彈守
の一族が世を捨て、土高地に移り住んだ時
殿の無聊を慰める爲に臣下の人々が作つた
庭が此の土塚は殿様の墓である云ふ世間
の人はやれ不運だとか不幸だとか申される
が此の天然美に尙人工を以つて彼様な庭園
などを作る事の出来た殿様なら僕もなりた
いと思ふ

が人間の嗅みのない此の深山の温泉に歸り
乍らすき透る様な夜の空に輝く北斗星を見
て居ると幽かに清水の滴る心の底迄透み亘
る
夜になつて案内者か來て此の地の名此舊蹟
大正池田代の池や明神ヶ池の話を聞せてく
れた明日の案内を約して床にはいつたが夏
まだ半なるに寒さは一通りでなくY君と同
衾の話も最足に成立つて疲れた身体は朝ま
で死人同然であつた

霧深い温泉宿に一夜を明して八月八日窓よ
り望めば梓川の清流を隔て、六百山霞澤岳
が樺梅の針葉樹で眞黒に蓋つて居る右手に
は明日登らんと思ふ焼岳が石礫の外一物を
も止めぬ赤裸々の山骨を顯はし大正二年に
出來た噴火口は中腹に從來よりある舊噴火
口は頂上に眞白な水蒸氣を噴出して藍色に
澄み渡つた晴空から浮出した様な景色を見
せて居る朝飯を食つて居ると昨夜の案内者
が風邪で臥床して居るから同行が出来ない
事を告げて來た病氣なればせんかたなし朝
飯もそこ／＼にし草鞋を穿ち温泉場の主人
に聞取つた方向に明神ヶ池にご進んだ

イブガ天國から放逐された様に僕等は渡れ
／＼と高地に歸つた
此の地の名物としては餘り旨くもない「コ
ナシ」のジャムがある是は殿様時代に梓川
の河原に植たものが今では自然の果樹園に
なつて随分果實が採れる様に成たから清水
屋の親爺の發案でジャムに作る様になつた
ものだらうな
暖かい奇麗な山の湯に大きな身体を延ばせ
る丈延ばせて浸つて居る若い二人の男が保
護林は温帯北部から寒帯に亘る林相を持つ
た眞の原生林であるとか林學なんてものは
机の上で計り考えて居ては深く解るもので
はない此の様な實際の標本を見なければ吾
々の理想とする天然更新は出来るもんじや
ないとか人間の破壊力か段々山奥迄入つて
行く今の世には此様な立派な景色を標本と
は法律の力で保護するが當然である此は日
本の爲許りでなく世界人類の爲に必要であ
る此れを繪にして是れを詩にして世の我利
我利亡者を導つて行かなければならんとか
素敵もない熱を吹いて居る奴がある唯かぞ
問へば今や到着した大坂大林區の造林の
御役人の熱であつた
かくして第二日目の天氣を氣すかい乍飛び
起きて見ると梓川の清流は吾々を迎へ右手
には此れから登らんとする焼岳が手まねき
をして居る午前八時に出發した山樺木白樺
が密生して麻畑の様になつた處や舊い樺梅
の原生林に彌桃のからまつて魔物でも居る

池は梓川の沿岸だから川に沿つて上りさへ
すればい、解けであると思ひ乍ら來た時に
通つた河童橋を渡り山梨の大木の蔭に昔の
牛小屋か半ば破れて建て居る邊から林道に
別れ冷たい切れる様な梓川を横切つて川岸
一面に密生して居る川柳の單純林を通り嘉
門次の小屋に出る、是は保護林になる前に
日本アルプスの主と言はれた位地理の明る
い又人数倍猛烈な獵人である嘉門次爺さん
常に此の邊に出没して冬は「クラシ」、夏は
岩魚と樂園内の可憐な動物を獵り歩き夜の
宿として勝手に作つた小屋だぞうだ何んだ
か獵人日記にでも出來てさうな代物である
樺梅山櫻落葉松等の密生して居る森に圍ま
れ穂高の絶壁の直下に周圍十町位の池が
二つ瓢箪形に連つて居る暗い紺の様な水面
には名も知らぬ水草の眞白な花が水の精か
とも思はれる姿に咲いて居る岩魚が水草の
蔭でビシリ／＼と跳るのが静かな空氣を
透して鼓膜を衝いて來る、其の音が如何に
も寂しい恐ろしい感じを與へる此の寂寞と
此の暗さは到底自分の様な無神論者の永
く居るを許さぬ嚴肅を以て迫るので樂園の
樂しさに酔ふ事も出來ず、岩魚な釣りの嘉
代吉も最後を此の池にしたと思えば美麗な
山頂池も恐ろしくなつた

樺梅唐檜落葉松白樺等の混生林を抜けて大
正ヶ池の邊に來る對岸に移らふと思つて岩
魚釣の小舟に乗り出すと水は相變らず清らか
で中に一つ一つ敷えらる様な砂の上を一

池の浮島に休んで握飯を喰つて休むで昔の
殿様の詩の様な生活を思ひ乍らついうとう
とどやる自分が最早や殿様成た夢を見てび
つくりして急いで歸る氣になつたアダムと

かと思われれる程真暗な森の中を昇る噴火の
際泥流を押し流した為火灰の層が割れ
て深い溪となつた邊りを通る時は吾々林業
家とか何とか威張つても矢張りびく／＼も
のだ恐しさを隠して漸く燒岳と硫黄岳との
鞍部に着く此の參越が飛彈と信濃の國境で
昔飛彈守が上高地へ逃げた時通行して以來
兩國の通路となつたと言ふ話し硫黄岳の頂
上の直ぐ右手に黒い安山岩の間から水蒸氣
を少量づゝ噴出して丁度庭の築山に植へら
れた百合の咲いて居る様に見える燒岳の方
は先頃噴火當時枯らされた針葉樹の幹が港
に集まつた櫓の様に立て居る是早幾分風化
し岩礫の上には一面に丈の短い熊笹が密生
した縁と寂しい枯木の色と相映じ一種の奇
觀を呈して居る昇るに従ひ熊笹も枯木も無
くなり唯一面の石礫となる直徑一二尺の丸
い角ばつた奴が賽の河原も斯くやと思ふ許
りに轉つて居る間を這い上るのは中々恐ろ
しい物だ脚を踏み懸けるとコロ／＼崩れ手
を懸けるとズル／＼と滑る此のガラ／＼ズ
ル／＼が四十度近くの急傾斜を飛び下り
んだから堪らない滑り出してから五六間も
すると非常な勢を得て衝突した處の石塊を
捲きぞひにして轟々と地響を打つて落下す
る登山の途中で彼等を頼りにして兎角遅れ
勝手に付いて来る學生が六七十間遅れて昇
つて居たが危険だから彼等の追付くまで休
み乍ら見渡すと日本第一の險山奥穂高前穂
高や槍ヶ嶽が一行になり天空を貫く剣の頂

が並んだ様に見える一方には六百山霞澤岳
長嶺山嶽々岳などと言ふ譯が真黒い針葉樹
に被はれて横綱の肩の肉見たいにゴツ／＼
と立つて居る槍ヶ嶽との間から銀の帯の様
に梓川の奇麗な水が流れ出して来て燒岳の
麓近く脚下を廻つて緑の内へ消えて行く噴
火の爲に水の堰止められて出来た池昨日
君と魚釣りの舟に乗つて遊んだ大正ヶ池が
見える釣魚者の上手なのに感心したのも
君かシイヌを落して大喧嘩をやつたのも
の池だ日光の反射して鏡の様にキラ／＼光
つて居る邊りに上高地温泉旅舎が構寸箱の
様に小さく見ゆる

の畏氣で暫くもじつとして居れない危
な馬の脊の様な所を這つて新噴火口の方
に逃げる此處も盛に地獄の底から噴出す
ウ／＼と言ふ恐ろしさは變りはない其の噴
火口の近くに硫黄の大塊がある濡れた手拭
で口と鼻に當て、瓦斯の中を突進し火口に
近づき硫黄の大塊を澤山抱えて硫化水素の
中を歸つて来た其の苦しさと言つたらない
君の腕巻時計は何時の間にか眞黒になつて
しまつた僕のボツケツトの中に在つた時計
迄も曇つた
安山岩の破片で小刀の刃の様な角石を恐る
恐る傳つて半里も下ると亦噴火口がある水
蒸氣が噴出して居る丈で尻の様なものだ
蕪し此の邊枯木の檣熊笹の海に泳ぎ込む前
の人も後の人も一寸頭だけ見えて唯がさか
さど手足を使つて十七八町も泳いだと思ふ
頃漸く梓川の岸に出た
此の燒岳で「クラシ」を取つた面白い話が
ある嘉門次爺の生きて居る時の事「クラシ
」は犬とにらめつくらせるもんなら一日
でも頭を振つて居る、嘉門次爺が鐵砲持た
い時に燒岳で「クラシ」を見つけたから犬
を木に縛つて眺めくらさせて置き上高地迄
鐵砲取りに下りて来て夕方上つて行たがま
だ眺めくらして居たから撃つてやつたなん
て途方もない大きな傳説がある
又歩き出すと脚本の藪からは山鳥が四五羽
大きな羽音を立て、飛び出す尙尙暗い千古
の原生林には岩魚も山鳥もクラシ、も人間

と云ふ猛惡な動物の居るのを知らず悠々生
を樂しんで居る有様は實に得難き樂園で有
ると思ふ、天國と言ふ語は西洋の話の外か
にはない様に教育されて居た自分は此の保
護林に入つて此の樂しい實際を見思はず樂
園の永く幸あらん事を祈つた偽文明の皮を
被り天然を破壊するを以て自己の本分と心
得てる動物かこの樂園を絶対に保護する
は實に吾々の重大なる責務である
見渡す限り山又山で自分等の位置は全く溪
谷になつて居るんだ君も愉快に語り乍ら
上高地を發足して後を振り返つて見れば
日本第一險山たる穂高嶽其他の山々も別れ
を惜しむ様な顔をして見送つて居る
原口林學士が講堂にての講演(山岳美)の中
に最も誇り最も贊賞した上高地を流れて居
る河全く美麗なれ原口林學士の話も虚言
どころか話以上清い水だ加ふるに周圍
に聳ゆる總ての山を寫して何處迄も／＼と
押し流して行く其の何とも言はれない總て
の景色に心を残し下るも足は以然として上
高地より五里の遠距離の白骨温泉に向つて
居た

昨夏の記憶をたどり木曾川の
流れをき、つ、筆のまゝに
九、一、二三 安曇生

巢だつ頃から (一)

濁川 萍太郎

誰だかが彼岸すぎ迄と言つて書いたもの
を一寸讀んだ事があつた
彼岸のすぎる頃迄書かうといふ心で書いた
ものと思ふ
私は、巢だつ頃から……と題して、何時
頃迄書けるか知れないが、折にふれて書い
て見たい様な氣がした

巢だつ、果して私は此の三月に巢立つ事
が出来るかどうかは疑問だ
けれど随分以前から、就職口の希望を出す
様に、といふ先生からの御注文によつて見
ると、どうやら自分も卒業が出来る様に
思はれる

三年間冷たい風を吹け此の抗の原のお
だやかな巢、に親鳥の指導を受けながら、
荒い風の吹いてる空を仰いで巢立つ日を待
つた、親鳥の話によると、舞ふといふ
事が、恐ろしい様にも、亦世話のない事に
も思へる、早く舞つて見たい、鍛えた翼が
果して舞ひ立つ用をなすであらうか
未だ／＼口端が、黄色だ尻に卵の殻がつい
てる、けれど世の中では此の將に巢だそう
として居る私共を、大手を廣げて待つて、
呉れる様な氣がする

私は時折り巢の中から小さい頭をもたげ
て四方を見渡して見る、寒い／＼北の方の
國にも甘い獲物がありさうだ、暑い／＼南
の方の國にも甘い果物がありさうだ、
親鳥に聞いて見るが曖昧な事を言つて居て

一體私は何處へ舞つて行つたらよいのやら
見當がつかぬ
最後の翼の試験をされて合格すると紙片を
一枚呉れるさうだ
追い出さる日も間のない事だ
さて何處へ向けて飛んだらよいのやら、事
によると今一年巢に止まつて、追廻はされ
るのかも知れん

若し今度皆と一所に巢立つ事が出来ると
したら、卒業させて貰へるものとしたら、
第一に何處を目標に飛んで見よう
巢の中から仰いだ大空、學窓から見た社會
……それは何んな懸隔をもつて居る事だらう
卒業生などにも折々出會ふ事もあるが、學
校でやつた事なんか本當に初めは何にも役
にた、んぞつてよく言はれた
果してさうしたら私はどうしたらよいの
だらう、お互ひにこうした不安に襲はれつ
、最初出かけるのか知らん

巢だつ日の近づいた昨今は就職日如何の間
題よりも、第一にそれが不安にならぬ
是で又二三年立つて古巢に歸つて来て見
ると、自分等の在校生時代に聞かされた様
な事を言つて、卒業生然として居るのかと思
ふと面白い

福島の狭い町を一通りしても流行性感胃
豫防マスクの廣告が三軒や四軒は出て居る

恐ろしい勢いで流行したものだ、流感で通
てる、新しい言葉の字引……てな本を一
寸見た事があつたが訂正何版だかに乗るこ
とであらう

縣からの達して運動も集會もなるべく避
ける様にこの事で、今年の一月からといふ
ものは、道場に竹刀の音もしなければ、辯
論會でヤシヤト嬉しがらる事もない
朝飯を食つて登校、放課して帰宅……唯さ
うして機械的に動いてる様な気がする
此の福島にはストライキもなし普通運動と
やらもない、沈滞し切つてる

町の衆があつた葉漬をギヤシ……とつ
まみながらお茶飲み話の種になる山林學
校の兎狩りも申止だ
あの新聞役場の上の方で兎に追はれて喜ん
で歸つて来ては、寄宿の炊事で牛や馬の肉
で暖まる事も出来ない
古來山林學校の兎狩りに兎のそれを例は少
いさうだ

近頃休み時間に教室のストーヴ會議に、そ
の肉代いくらをフイにするのも惜しい何と
かしてはといふ議題の出る事がある
流感豫防條件の一つとして、肉食して酒を
毎晩少しづつ、飲むべし、とある所を見ると
異議も出さうもない、而も條件中に運動は
禁すべしとある、兎狩りは止め、肉は食ふ
すべてか條件通りだ
古人謂へらく「義を見てせざるは勇なきなり」と

嬉しかつた漸やくにして自分は一技術者として技術的業務に専攻する事の出来る身となつた
課長の隨行として共に出張する事になつたのは赴任して一ヶ月半の後の事であつた自分としては初出張だけに不安心なものであつて何の調査に行くのか合点かゆかず只命らる、儘に行動して些少の過失だになく二日目の夕歸歸したが歸つて考へて見れば成程合点もゆかぬ等調査とは多儀だけで只山祭に列する課長の隨行として言はば日吉丸に代りて草履取役を勤めたに過ぎないのだ

五六日して今度は荒廢地調査(砂防工事等)施行の爲現在崩壊せる箇所(調査)の爲に二十日間の出張する事になつたごんな具合に調査するものか砂防上の教授は受けしもの、實地に付いては初めて故調査の爲の出張でなく自分は寧ろ實地見學の爲であつたと言ひ度い同勢四人が二組に分れ人夫を三人づ、使ひて調査した實地に見れば思つた程面倒でない只崩壊地を二間竿で梯形や矩形に劃しつ、邊を測りて面積を出したに過ぎぬ私は「クリマーター」を用いて句配を調べた學校では得意顔になつて使用した器械もさあ實地になると念には念を入れて讀むのだ二十日間の出張は決して短いものではない早く歸歸したいと云ふ氣は誰しも持つて居たけれども突飛な自然生活海岸散歩魚取り等に依りて多少意屈を忍ばして居たよ

今日暫らく缺員であつた佐藤先生の後任に田中先生が見えて新任紹介式があつた臨時時間表が改正されても未だ臨時時間表だ、何時正しい時間表になる事やら
吾々の巢立つ日は近づく、抗の原の校舎は雪に埋つてる、さうだ裏の苗圃の雪が解けて、あの落葉松に緑の芽の萌へる頃は、何處の山奥でなつかしい林友を待つ事だ
二、一八夜……

若き後輩 諸兄の爲に

東北の都にて 仙華 生

「可愛い、兒には旅をさせ」と云ふ古語のあるばかりに不得止退ひ出されてシツ……と奥州路に義經の後をば慕ひ來つて今將に一ヶ年の過去を生もうとするに當り目前に卒業の榮を擔へる若き後輩諸兄の爲めに自分の過去一ヶ年を物語つて見様とするものである
忘れもせぬ客年の四月二十二日は私として生涯忘る、事の出来ない社會への第一歩を踏みだす日であつたべかくした様な辭令を受けて……「明日から自分は何をしたらよいのか」……と不安な心に壓せられて椅子に軽くもたれて居たのも此の日であつた……「當分僕の方の仕事を取上げて戴く事にしよう」

ました」……斯ふ言つて私を空席に導いて呉れた私は其の時始めて職(食)にあり付いた様な氣かして嬉しかつたとして其翌日からは文書的な事務を専心に眞面目に然し全力を傾注したものであつた

日を重ぬるに従ふて事務の總ても自然明瞭となり同時に自分を導いて呉れた人は一、縣屬である事と知る事か出來た「今まで受けた林學のあらゆる智識は何時活用し何時適用し得る事か出来るのか」「てよ?は十八才のお役人としては大した失望であつたのだ
何時も其の仕事をする度に嘗て林政の時間西澤先生の官廳に於ける書類の回議淨書校合等に付いて御念入のお言葉が思ひ出されて實に嬉しかつたうして一日の仕事を終へて歸ると直に林政の本を取り出して恰も自分の生命が秘せられて居るかの如くに參考資料を探るのであつた

今其の當時を想ふに及んで痛切に湧き出づる事は一、先輩諸兄が懇切に指導して呉れ又自分も打解して色々聞く事の出來た其嬉しさ二、指導せられた總ての事柄が深く頭に刻まれて容易に忘れられなかつた事三、友もなき異國にては手紙と云ふもの、非常に待ち遠しかつた事等である
其れから一ヶ月位過ぎて後任者が來ると同時に今までの仕事は臨時的であつた事も知れた併し自分に取つては今までの仕事が大に得る所があり無駄でなかつた事が非常に

歌つた「雨の十日も降ればよい」とあの歌も此時適用せらる、のであつた愈歸歸と云ふ事になると四人共ガタ／＼自働車に乗り急行列車に乗つて早速歸つたものだ
暑い／＼八月の出張は公有林野の施業案編成の爲同行二人の淋しい出張であつたけれども自分は施業案の編成を理論的に教授されただけで實地に付ては應用が出來なかつた其次に測量は實地でやつただけに自信はあるが其他の参考事項の調査に至りては随分頭を捻つたものだそれに今度は以前の出張と異り二人が別れ／＼に調査するのであつた殊に若痛を感じた事は「コムバス」を使用して人夫を便役する事自分よりも二倍も三倍も年喰つた連中を使役するのだから苦しい筈だ

命じなければ勿論動かない黙つて居れば腰を据込んで吞氣相に糞を喫して世間話などやり出す、併し初の内はさうしても言葉が思ふ様に出ないのだ
若い役人の苦痛として之程面倒なものはないと言ふても過言ではないそこで人夫を使ふには最初から子供臭い所を出さすにどこまでも大膽不適に構へて巧に騙し／＼使ふに眼を併し之れは其の人に依り或は困難かも知れぬ何せよ之が若い役人としての大なる苦しみである事は同年輩の同境遇に立つ友の等しく同感とする所であらう

去年の夏頃の誌上に同窓。君の北海道に於ける活動振の一節を拜見して羨やまく思ふ

事もあつた十月も又同様の調査の爲出張を命ぜられた行五人其の中には先輩。兄も居て何かに付けて心強く實に愉快であつた斯うした苦しい出張をする事數回其の度毎に自心奮は起し自然に其の道の研究に努むる様になつた之が所謂青年の燃ゆるが如き野心でも言ふであらうか
熱烈な悲苦の泉より湧いた涙に依りて研かれし塊こそ偉大であり尊いものではあるまいか其後は出張もせず専ら内業の整理(製圖・淨書)に努めた

特記すべき八年も將に去らむとする師走の下旬人には例の年末賞與に鶴首の有様であつた自分は其以上期待し鶴首した事は八ヶ月振の歸省であつた別に變化もない別に面白くない併し有形無形に戀しいのは蓋し人情としての通性でももうやがて歸歸すべき日は來て戸外に出た時現し難い感に打たれた……車中急に思ひ立つて千葉の海岸に病の友を訪づれた事が何よりも嬉しく満足であつた
××××××××××
私は今過去を追想するに及んで大正八年程自分に急激な變動を興へた時はなく又將來に對しても絶体ない事を確信するものである

そして彼を連想し此を思ふに付けてよく今迄重層した苦痛を忍んで今日に至つた事を私は私自身に感謝したい
年少者だけに一人一倍の苦境を味ふた私は勇奮努力して前途幾多の支障に耐へ尙小成に

安んぜず大に向上の發展を期し年來の宿望を貫徹したい 終り 附下らぬ事に貴面を汚せし事を多謝す 九二、一六

空想と煩悶

小がた生

「寒き寄宿の一夜」寮舎の鐘は凄々たる深夜を破つて遠く鳴り去つた、朔風尙も狂ひ續け、粉雪益々窓を打ちて森狭の冬に彩つた、景色の餘り面白さに寒さを忘れて頭を外に出すや、皓々たる雪は山を襲ひ谷を渡りて机の原寮舎のガラス窓を振動せしむるなり、寒の月は凍として中空に懸り冷光水の如く下界を照せり、不肖漸々として寂寞に感ぜしが、やがて身を返して床に就く寒月、寒風、夜の吹雪、他郷の空、と空想は空想と生みて果つるを知らず、凶寒は益々厳しく孤衾は益々冷なり

「小人の空想」眠られない余は余の前途を展開して様々と空想を浮べた、春風徐に吹き来りて萬樹緑に返るが如く、或は黒雲動々として来り疾風樹葉を破るが如く、或は木の葉黄落して天地寂たる如く實に刻々轉々せり、學を卒へし曉は遠き異境の空に飛鷹し、一攫千金錦と飾つて歸るか、否々老杉老松參差として道を挟むる深山にて一人書に樂み、パンに苦しみ

て儼なき生涯を送るか、否々蒼鬱たる森中に入り消々たる水滴をたよりに渴を慰すか、否々渴すとも饑すとも自己を修め業に服して天命を待たん、實に取る可き道は多い、事實は暗黒である、判する力に遠い、氣は益々昂奮七道は益々峻々たり、自ら空想を描いて自ら煩悶す、何んぞ愚ならざる哉

「此では煩悶せざるを得ん」然るに一旦復雜なる社會に足を踏み出した處が、此に要するエネルギーを貯ふる乎、自己否、若き者の多くは踏み出すべき要素が更でない、さもなくとも活動す可き要素はもたざるべし、嗚乎、吾が小人は素養はない、經驗は薄い、容量が悪い、社交に接しない、則ち井の中の蛙である、春の嫩葉である、若き焔は如何に奮ふとも鐵石未だ溶けず

「頼み、唯先輩あるのみ」親鳥に捨てられし殻は何處に飛ばん、飛びて何處に倚らん、實に然り小人誰に倚らん、吾々不具者をして救はんとするが如き博愛者ある哉、唯闇黒の中に一點の燈火を認めて喜ばざる者ある乎、倚らざる者ある乎、此の一點燈火こそ博愛者にあらず、同情者にあらず、救助者にあらず、第二の指導者として尊敬服従すべき闇中の燈火にあらずや、吾々兄弟たり、先輩諸兄よ、子弟として愛撫指導されよ、吾が校の現在たる哉空想煩悶〇實現」

扱て余等は煩悶の結果として第二の指導者を得満足せり、然るに満足と欲望は斷乎として隔截ざるを喜ばない、然らば次に來る欲望と如何か、欲望は益々大にして抗の原原頭に巍然として建てる、吾が最愛なる木曾山林學校として今少し理想を實現しめんとするのである、校よ、校は今空想の時代にあらず、煩悶の時代にあらず、實現の時代にあるなり、果して理想を實現しむるや、昇格の價値ありしむる様所謂日本唯一の學校をして内容充實せしむる事日本唯一の學校とせよ、薫風、蕩として草木を壓し、堂々として旭日天に昇る如く、吾が校の發展を期されん事目下の急務なり

諸君俄然覺醒決然躍起せよ

沈黙庵憤慨生

諸君が既に御存の通り僕は愚物で有て才もなく智慧もなく隨つて經驗といふ事は尙更の事にして諸君に彼れ白面の一書生亦何を知らんと嘲けられんも到底抗辯する事出來ず去一寸の虫にも五分の魂と云ふ事ありさらば如何ぞ此の衰へる秋津洲の現代に甘んじ傍觀し居られやうや故に不才を顧す愚言を以て諸君の高き教を乞はんとす請ふ余をして缺言を弄せしめよ扱て諸君我が帝國の現代を見給へ如何なる寫眞が映射せられ居るかを先壁頭に國民教育の根本たる小學教育は如何に中等教育は如何に論を待た

賢明なる諸君には百も御承知二百も合點であらうが一寸語らん第一指導者たる教育者がサポータージユをやつとも尙賃金値上運動増俸の請求と汲々促々として不平を鳴らし教員の同盟休校之れ何んぞ愛國精神の欠乏せる醜態至極の至りならやす而し教育者の教育者たる本分を盡して然る後物價暴騰の影響により糊口を支へ難しと云ふなら賃金値上運動も増俸請求も大いによからうだがサポータージユをやつ安樂の内に糊口を支へて行かふと云ふ様な惰慢性より同盟罷業を起すとは實に言語道斷の沙汰にあらずや之等不埒なる教育者流は國民教育にありながら教育者の教育者たるを自覺せざる所以なり係る教育者流が教壇に起つて形式的の教鞭をとつたとしてどうして學生兒童の教育指導が出来やふか火を見るより明なり指導者が指導者なれば子弟も子弟いざと云へばストライキのプロバガンダを初める之れ身から出た錆にして故なきにあらざる源荒廢すれば河水濁流となるが如し濁流を清流にせんと欲せば須らく水源涵養をせざるばあらず

次に政治界實業界皆然り特に我が國精神界の衰退は驚愕せざるを得ず社會主義者平等主義者何んだ神田と云ふて危險物質が輩出し苟も一萬萬乘皇統連綿たる皇室を無視しデモクラシーの現代だ何んと扱かす粗忽的愚鈍分子が年々歳増加して來る傾向が見出された男子志あるものの胸中や如何に

想ふ憤懣萬里なるものありと必然なり亦家庭教育の中心となるべき現代女學生の風潮や如何に一般國民間に女學生墮落の悲難影し亦商業界は之れも矢張り同類者外國にては我が國商業界を如何に呼んで居るか日本は物品偽造國だ特にジャパン。名古屋大阪と云へば物品偽造狡猾無類のモデルだ名所だと彼等毛唐人の頭腦に銘せられて居る耳ならず蠻的視し排日の悲慘なる言を醸成して居る然しながら之れ御無理御尤な次第にあらず此の如く同胞一般奢侈に趨き墮落ト利己慘忍の惡風に感染せられて來た然らざるも國防上經濟上に於て諸強國より劣る事數等なるにも係らず亦精神界腐敗の現象顯れ表しても焼いても食はれんと云ふ仕末になつて來や嗚呼哀れ二千百の君子國の嘆聲發せざるを得ず目撃するもの耳朶に止まるものとして悲憤寒心戰慄せざるはなし故に諸君乾坤一鄭一番三尺褲しめ直し昏睡せる我が國實業界政治界精神界をして俄然覺醒せしめ迷律の船筏に諸方面改造の途上に一大濶歩の帆を孕らみ嗚呼然然暗黒界に漂へる我が同胞を救はんといで乗り出でんや

會員動靜

○新田讓君 江原道鐵原郡鐵原面四要里へ轉居せらる
○熊谷清逸君 北海道地方費森林岩見澤事務所へ轉せらる

學校便り

○沼田書記退職 本校書記沼田三郎氏は今回家事上の都合により退職せられ二月七日告別式を舉ぐ
○紀元節拜賀 十一日午前九時紀元節拜賀式を講堂に舉行す
○田中先生來任 佐藤教諭上伊那女學校へ轉せられ後久しく缺員なりし修身國語漢文科の擔當として田中隆壽先生來任せらる
先生は明治四十四年國學院大學國語漢文科を卒業せられ岩手縣師範學校愛知縣岡崎女學校山口縣山口中學校群馬縣富岡中學校等に教鞭を採られ今回本校教諭として來任せられたるものなり
○菊池先生來任 理化學の擔任として菊池一先生來任せらる
先生は大正二年東京帝國大學理科大學を卒業せられ岡山縣玉島女學校埼玉縣川越中學校群馬縣桐生中學校等に教鞭を採られ今回本校教諭として來任せられたるものなり

七宮先生謝恩金領收報告

- 金四圓 鷹、見、勳君
- 金壹圓 宮澤惠喜太君
- 金壹圓 仲田、惠金君
- 金壹圓 金井、澄水君
- 金壹圓 原田久保作君
- 金壹圓 篠原、具士君

金五圓	渡邊 知則君
金貳圓	關 琴 義君
金參圓	稻葉 增吉君
金壹圓	中村 五郎君
金參圓	荻原 惠治君
金壹圓	新井 清美君
金參圓	野 澤 清君
金壹圓	仲俣 伍市君
金貳圓	出雲 秀一君
金貳圓	安井 嘉一君
金貳圓	竹村 節三君
金貳圓	安江 銳太郎君
金壹圓	丸山 林一君
金貳圓	宮澤 末雄君
金四圓	山村 克人君
	三尾 貫三君
	鳴澤 義雄君
	矢崎 清海君
前號	金壹圓 吉川真夫君とあるは
	金壹圓 吉川光夫君
	金貳圓 吉川真夫君
	に訂正仕候
	の誤に付茲

林友代領收報告

金壹圓五拾錢 奧村安太郎君

金壹圓五拾錢 宮澤 末雄君

沼田書記より特別寄附
本校書記沼田三郎君退職に際し左記の通り
校友會宛御寄附ありたり謹んで謝意を表す

金貳圓也

大正九年二月廿三日印刷
大正九年二月廿五日發行
長野縣西筑摩郡福嶋町四〇四番地
安井 正 夫

長野縣西筑摩郡福嶋町三〇五番地
長野縣西筑摩郡福嶋町三八九番地
吉 藏

【定價金參錢】